

國學院大學學術情報リポジトリ

副詞「たとひ」の構文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 永弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001425

副詞「たとひ」の構文

吉田 永弘

論文要旨

本稿は、副詞「たとひ」の使用状況と構文を観察することを通して、逆接仮定ぎゃくせつかりていに関わる形式の消長を明らかにすることを目的とする。まず、「たとひ」が漢語の「仮令」「縱」などを訓読する際に当てた訳語を日本語文に取り入れて生まれた語だと考えられることを述べ、日本語文で用いる際には、漢文訓読を意識した箇所いせうで用いていたが、中世後期にはそのような位相の

偏りがなくなることかたよを示した。次に、「たとひ」の構文を意味レベルと形式レベルけいしきとに分けて観察し、意味レベルでは「たとひ—逆接仮定」として変わらないが、形式レベルでは「たとひ—ども」を典型として、「ども」「む+助詞」「こそ—め」から「ども」「命令形」「ても」「ばとて」「うと・うが」へと消長があることを示した。

一 はじめに

現代語の「たとえ」は、従属節中の「ても」と照応して逆接仮定条件の構文をなすことを典型とする副詞である。この「たとえ」は、「たとひ」という少し異なる語形で、平安時代から用例を確認することができる。そのため、栄枯盛衰のはなはだしい副詞の中では珍しく、通時的に構文を観察するのに適した副詞である。本稿では、平安時代から江戸時代までの資料を対象として、副詞「たとひ」を通時的に観察し、「たとひ」の使用状況と構文を明らかにする。また、「たとひ」と照応する形式に着目することによって、逆接仮定に関わる形式の消長を明らかにすることも目的とする。

二 「たとひ」から「たとえ」へ

はじめに、本稿の対象とする副詞の語形の変化について簡単に触れておきたい。

平安時代には「たとひ」という形でしか現れない。「たとへ」という語形は「たとひ」の「ひ」から「へ」と母音が交替したか、下二段活用の動詞「たとふ」の活用に類推したかして現れたものだろうが、鎌倉時代の終わり頃になって現れたようである。書写年代の明らかな資料で最も古いものは、元徳二年（一二三〇年）の識語がある足利本『仮名書き法華経』に見られる例である（吉田永弘〔一〇一七〕）。

1 たとへよにいてたまえとも、このほうをときたまうこと、またかたし。（1・118）

約一〇〇年後の世阿弥の自筆能本に見られる用例²は、「タトエ」を「タトイ」に修正している。「たとへ」という語形は規範的な語形ではないと認識されていたようである。なお、「エ」「イ」と表記されているのは、当時すでに非語頭の「ヒ・へ」と「イ・エ」との区別がなくなっていたからである。

2 コノモンナ、タト^イキウナンノサイニアウトモ、（盛久、応永三〇年（一四三三年）奥書、影印17頁）

この規範意識は続くようで、『日葡辞書』（一六〇三年）では「Tatoj」の見出ししか挙がっていない。キリシタン資料では「たとひ」だけを用いるようである。その後、寛永一九年（一六四二年）に書写された虎明本狂言では、「たとひ」8例に対して「たとへ」6例と均衡して用いられており、一八世紀前期の近松門左衛門の世話浄瑠璃24作品では、「たとひ」1例に対して「たとへ」34例となって「た

とへ」が優勢となっている。しかし、「たとひ」はそのまま使われなくなったわけではなく、「たといわずかずつでも」（太宰治『人間失格』一九四八）のように使われ続け、現代の国語辞典でも「たとえ」の古い言い方（『新明解国語辞典 第七版』三省堂、二〇一二）として「たとい」が立項されているように、「たとひ」から「たとへ」への交替はゆるやかに起きている。併存する時期においては、語形の新旧に基づく位相の差があるのだろうが、構文に着目する本稿では、両形の異なりによる差異は問題にならないようなので、以下、両形を一括して「たとひ」と呼んで扱うことにする。

三 文体的特徴

本節では、先行研究を踏まえながら、「たとひ」について明らかになっていることを見ていくことにする。

「たとひ」が平安時代から現れるとは言っても、和文資料で用いられることは稀で、語彙量の多い『源氏物語』でも、次に挙げる4例しか用いられていない。

- 3 (僧都)「……かかる老い法師の身には、たとひ愁へはべりとも、何の悔いかはべらむ。……」（薄雲、六二〇頁）
- 4 (僧)「ソノ得体ノ知レナイ物ガ）たとひまことに人なりとも、狐、木霊やうのもの、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ。……」（手習、一九九一頁）
- 5 (常陸守)「……たとひ（寿命ガ）あへずして仕うまつりさしつとも、残りの宝物、領じはべる所々、一つにてもまた取り争ふべき人なし。……」（東屋、一八〇二頁）
- 6 日本には、さらに（帝王ノ血統ノ乱レヲ）御覧じ得る所なし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。……など（冷泉帝ハ）よろづに思しける。（薄雲、六二三頁）

用例3・4は僧の発話文、5は常陸守の発話文に用いられ、6は冷泉帝の心内文とも地の文とも解せるところに用いられている。いずれも男性の登場人物による使用という偏った使い方がされている。『源氏物語』では、僧などの学識のある人物が訓点資料に多く見られる語を使用することは、よく知られている(築島裕「一九六三・八一」)。漢文を訓読する際に用いるような語を使用することで、格式張った場面であることや登場人物の属性を示す表現効果を与えている。「たとひ」もそのような語の一つであり、和文資料で用いることが稀であるのは、訓点資料で主に用いられる文体的に偏った語であることによるのである。

訓点資料の「たとひ」については、春日政治「一九四二・一九五」、久山善正「一九五九」、築島裕「一九六三・五三五」、大坪併治「一九八一・三二六」など、これまでに多くの調査・研究がある。その成果として、次のような点が明らかにされた。

- ① 「假令」「縦」「設」「若使」などの訓として「たとひ」を当てること。
- ② 四段活用の動詞「たどふ」に由来すると考えられること。
- ③ 逆接仮定条件節のほかに順接仮定条件節で用いた例があること。
- ④ 「例えば」の意を表す例があること。
- ⑤ 院政時代の頃から「たとひ」と「もし」で逆接と順接を分担するようになること。
- ⑥ ②については、四段活用の動詞「たどふ」は文献上での確認はできないが、「たとひ」がイ段で終わる語形を持つこと、次の用例7のように名詞として用いた例が確認できることから、かつて四段活用の動詞があったと想定されている。

7 たとひに言ふも、(枕草子・木の花は、八七頁)

③について、先に挙げた『源氏物語』は、用例1〜3が「とも」、4が「むにても」という形式であったが、いずれも、現代語「たとえ」と同じように、逆接仮定の意を表す形式と共起している。訓点資料に用いられた順接仮定条件節で用いられる例は、次のような例である(春日政治「一九四二」の挙例と訳文による。漢字は原文の漢字、平仮名はヲコト点、片仮名は仮名点で記されたもの。また、

丸括弧内は補読、亀甲括弧内は平仮名に改めた漢字である。

8 設令^レ違フこと有^ラば〔者〕終に敢^ヘて覆蔵セ^シ〔不〕。(西大寺本金光明最勝王經古点、卷二・一一紙)

また、④の「例えば」の意として用いた例は次のようなものである(築島裕「一九六三」の挙例。訳文は『石山寺資料叢書 聖教篇 第一』による)。

9 仮使^ヒ鳥と角鴮と乃至永に〔於〕涅槃に入^ルこと等^トいへり。(法華經玄贊卷第三、四〇紙一一〇七)

築島裕「一九六三・五三八」は、③④の用法と⑤の変化を踏まえて次のように述べている。

「タトヒ」という語は元來動詞「タトフ」の連用形で、「或る概念に添へて他のものをそれになぞらへる」という意味を持った語であり、広く実在しない仮定上のこと、又は比喩的なことを表はした。「タトヒ」が仮定条件で順接をも逆接をも従へ、又、「タトヒ…ノゴトシ」のやうな形で比喩的な意味をも表はしたのは、その当然の結果であつた。然るに、後、比喩的表現の用法や、仮定条件の中でも順接の用法は衰へ、ただ仮定逆接条件だけが残ることになった、といふやうに考へたいのである。

これを「たとひ」の構文という観点で読むと、「たとひ」が述語の形式を拘束する力の弱い段階(構文として固定していない段階)から強い段階(構文として固定した段階)への変化があると捉えているように読むことができる。

ここで指摘しておきたいことは、訓点資料による「たとひ」の用法の変化は、漢文で書かれたものをどのように訓読しているかという訓読法の変化を記述したものであつて、「たとひ」という日本語の構文の変化を記述したものではないという点である。「たとひ」を

日本語の構文史の中で捉えようとする場合には、日本語を書く場合にどのように使っているのかという視点で、「たとひ」の用法を観察していかなければならないだろう。

その際、「たとひ（仮令・縦）」の例があっても、a 漢文を引用した場合、b 漢文を書く場合、c 漢文訓読体で書く場合には留意が必要である。a は訓点資料の例と同じであり、b は日本語文を書く場合としていない点で異質である。c は何をもって漢文訓読体とみなすか判別が難しいが、考慮に入れたほうがよいだろう。

このような留意点を踏まえ、本稿では、日本語文で用いた「たとひ」を調査対象とし、「たとひ」と照応する形式に着目して考察することにする。

以下の考察では、便宜上、一四世紀前半までに成立した資料を前期、一四世紀後半以降に成立した資料を後期として分け、四節で前期、五節で後期の「たとひ」の使用状況を見ていくことにする。

四 一四世紀前半までの使用状況

四・一 用例数と分布

次頁の表1は、一四世紀前半までに成立した資料の「たとひ」と照応した従属節（相当）の形式の用例数を示したものである。⁽²⁾なお、漢字表記の場合など、形式が確定できない例は除外した。

成立	資料名	とも	ども	未然形+ば	こそーめ	む+助詞	む+名詞	べし	すら	にても	とても	「例えば」の意
10C	古今和歌集	1										
	うつほ物語					1						
	三宝絵	9	4			1						
11C	源氏物語	3				1						
	栄花物語	1										
	雲州往来	6										
	夜の寝覚					1				1		
12C	今昔物語集	57	5		1	1		1				
	法華百座聞書抄	1										
	宝物集	2	2									
	高倉院升退記	1										
	水鏡	4										
13C	建礼門院右京大夫集	2										
	無名草子	1										
	方丈記	1										
	発心集	19	4			1					2	
	海道記	4										
	古事談	2										
	古今著聞集	6				1						
	十訓抄	6								1		
	歎異抄	3										
14C	徒然草	2	2									
	延慶本平家物語	46	3	1	3		1		1		1	1

表1 前期の「たとひ」の使用状況

日本語文での使用状況からも文体による偏りは読み取ることができる。和文資料にはほとんど用いられず、『今昔物語集』『延慶本平家物語』という漢文訓読体に近い文体を持った資料に用例が多い。『今昔物語集』は、説話の出典に漢文資料の多い巻一〇、変体漢文資料の多い巻一一〇、和文資料の多い巻二二〇〜三二〇というように、巻によって出典の差に基づく文体差のある資料として知られているが、65例の内訳は、巻一〇に26例、巻一一〇に29例、巻二二〇〜三二〇に10例と、漢文訓読調の巻に用例が多くなっている。和文資料では、『源氏物語』で偏った使い方をしていたことは先に見たが、『古今和歌集』の「仮名序」にある例も、「をや」という漢文を訓読する際に用いる表現とともに使われている。

10 たとひ時移り事去り、樂しび悲しび行き交ふとも、この歌の文字あるをや。(仮名序、一七頁)

このように、和文資料には使われていたとしても、漢文訓読を意識した使い方がされているのである。

四・二 照応する形式について

三節で見たように、漢文を訓読する際に用いる「たとひ」には、逆接の形式と照応する用法の他に、順接の形式と照応する用法と「例えは」の意を表す用法があった。ここではそれぞれの用例を検討していくが、はじめに、現代語の「たとえ」にはない二つの用法から見えていくことにしたい。

「例えは」の意を表す用法については、『延慶本平家物語』に1例見られる。

11 縦ヒ、以嬰児ノ蠶ヲ、量リ巨海ヲ、取テ蠶螂ノ斧ヲ、如向立車ニ。(三末32オ)

「たとひ」は文末の「ごとし」に係り、「例えは」の意を表していると解される。これは漢文で書かれた願書の例であり、仮名は小書

きで書かれている。先にbとして挙げた、漢文を書こうとして「たとひ」を使った場合の例であり、日本語文で使おうとした場合とは異なる例である。したがって、調査範囲の限りでは、日本語文で「例えば」の意を表す用法はないことになる。

また、順接を表す「未然形+ば」と照応する例についても、『延慶本平家物語』に1例見られただけである。

- 12 縦^レ、令打破^テ、登^テ候ハ^ハ、平家コソ仏法トモ云ハズ、寺ヲモ亡^シ僧ヲ失^ハ、カヤウノ悪行ヲ致^{スニ}依^テ、是ヲ守護^ノ為上^ル我等^ガ、平家ト一ナレバトテ、山門ノ大衆ヲ亡サム事少^モ違ワズ、二ノ舞タルベシ。(三末45オ)

この箇所解釈は難しいが、「たとひ打ち破らしめて登りて候はば」は「二の舞たるべし」に係ると解される。「令打破」という漢文の語順や、「しむ」「に依て」「体言+たり」などの訓点資料に特徴的な表現とともに用いており、先にcとして挙げた漢文訓読体で書く場合に近い箇所と言ってもよいだろう。漢文を訓読した場合以外でも、「未然形+ば」と照応した例が使われている点は注意される⁽³⁾。

この例の他に用いられた例は、逆接で解釈できる形式と照応しているもので、日本語文では「未然形+ば」と照応することはふつうなかつたと言うことができる。

以下、逆接の形式と照応した例について、複数の資料で用いられている形式を中心に見ていくことにする。

まず、逆接の仮定条件を表す接続助詞「とも」と共起した例が圧倒的に多いことに目を引かれる。「とも」には「といふとも」という形式も含めたが、『今昔物語集』では「とも」よりも「といふとも」のほうが漢文訓読調の強い巻に用例が偏ることが指摘されている(原栄一「一九六九」)。

次に、逆接の確定条件を表す接続助詞「ども」と照応した例もある(「といへども」の例も含めた)。

- 13 然レバ、譬ヒ、人有テ、何ナル事ヲ令聞ムト云ヘドモ、実否ヲ聞テ後、可信キ也。(今昔物語集、一七・四〇)

しかし、「ども」と照応した例について、築島裕「一九六三・五三八」が「意味は逆接仮定と考へてよいのではないか」と述べているように、用例13も事態が確定したことを表した例ではなく、「誰かがどのようなことを聞かせたとしても、実否を確かめてから信じなければならぬのだ」という一般論として成り立つ事態を想定している一般条件を表した例で、逆接仮定の解釈ができる（原栄一「一九六九」）。先掲の用例1も同様である。なお、一般条件を逆接確定条件を表す「ども」で表しているのは、順接確定条件を表す「已然形＋ば」が一般条件を表すことと同様に、古代語では一般論を常に成り立っているという既実現の事態として捉えていたことによるものと思われる（吉田永弘「二〇一四」）。

次に、「こそめ」は、「こそ」による係り結びで逆接の意を、「む」によって推量の意を表しているので、逆接仮定を表す形式と考えてよい。

14 譬^レヒ、現世^{コソ}。願^イガ。不叶^{ザラ}メ、後世^ヲモ助け給^{ヘカ}シ。（今昔物語集、一六・二九）

次に、「む＋助詞」として一括した形式に、「むにても」1例（源氏物語Ⅱ用例6）、「むにてだに」1例（夜の寢覚）、「むにつけても」1例（発心集）、「むをも」1例（三宝絵）、「むからに」2例（うつほ物語・古今著聞集）、「むに」1例（今昔物語集）がある。

15 たとひ後世を思はんに付けても、必ず神に祈り申（す）べきと覚え侍るなり。（発心集、卷八跋）

16 たとひ、人のはらから、なまわろくてもはべらんからに、それにつけてやおぼえのおとらん。（うつほ物語、四一六頁）

これらの例は、「む」によって仮定の事態であることを示す点で共通する。「むにても」「むにてだに」「むにつけても」「むをも」は他の事態を付け加える「も」「だに」を用いて従属節相当の句を形づくり、「むからに」「むに」は接続助詞のような働きをして、主節の事態と逆接の関係を表している。このように、準体法の「む」に係助詞・副助詞・格助詞がついて、全体で逆接仮定節相当の働きを

している形式である。「む」を用いるという点では、「む＋名詞」も同様だろう。

「むにても」については、「む」のない「にても」とする例もある。

- 17 (大納言)「わりなしや。生まれたるほどをおぼせ、わが後かと。たとひさるにても、男はさのみこそ侍れ。」(夜の寢覚、一四八頁)

この例は、「あなたに通い始めた後に他の女にできた子である場合でも」という事態を仮定して、「男はそういうものだ」と続けているので、一般論として表したものと解される。

次に、「とても」は、「といても」という逆接仮定の意を表している。用例18のように名詞に接続した例と、用例19のように終止形に接続した例とがあった。

- 18 たとひ同じ心なる中とても、幾世かはある。(発心集、卷四・一一)
- 19 設、打立テ後、聞給タリトテモ、御返有ベシ。(延慶本平家物語、三本37才)

次節の表2にあるように、「とても」と照応する例は後期のほうが目につく。比較的新しい照応形式であると言える(山口堯二「一九九六・一五七」)。

その他、孤例なので省くが、「べし」は推定の形式、「すら」は他の事態を挙げる形式のため、仮定の事態を表すことに関わったのだらう。

以上のように、「たとひ」を日本語文で用いた場合には、主節と逆接の関係にある事態を仮定的に表す形式と照応する用法にほぼ限られている。形式を見ると、「とも」と照応することを典型とするが、広く逆接仮定で捉えられる表現と照応している。したがって、「た

とひ―逆接仮定」という意味レベルでの構文を想定した上で、形式レベルでの構文は「たとひ―とも」を典型とし、逆接仮定に関わる諸形式と照応する、というようにまとめることができる。

四・三 本節のまとめ

副詞の「たとひ」について、久山善正「一九五九」が「本来の国語であったか、私は疑わしく思う」と述べているように、日本語文での使用状況の偏りから見て本来の日本語と考えるのではなく、漢文を訓読する際に用いた訳語を日本語文に取り入れたと考えるのが自然だろう。すなわち、日本語として存在した副詞「たとひ」を漢語の「仮令」「縦」などを訓読する際に訳語として当てたと想定するのではなく、漢語の「仮令」「縦」などを訓読する際に、名詞として存在した「たとひ」を訳語として当て、漢語の用法に応じて用いるようになったものを、日本語文で漢文調の表現をする際に副詞として取り入れたと想定するのである。日本語文で使用する際には、逆接仮定節で用いるという意識があり、逆接仮定を表す専用の形式である「とも」と照応することを典型として、逆接仮定の意に関わるさまざまな形式が関わったと捉えることができる。したがって、訓点資料における「たとひ―順接・逆接仮定」から「たとひ―逆接仮定」という訓読法の変化に伴う構文変化は日本語文では認め難く、当初から「たとひ―逆接仮定」という構文として用いられていたとまとめておきたい。

五 一四世紀後半以降の使用状況

五・一 用例数と分布

本節では、後期の「たとひ」構文の展開を見ていく。表1と同様に、一四世紀後半以降の使用状況をまとめたのが次頁の表2である。

成立	資料名	とも	ども	む + 助詞	とても	も	命令形	ても	でも	ばとて	うと	うが	とて	てから	その他
14C	覚一本平家物語	52	1	1		1	3								
	神皇正統記	2													
	増鏡	2													
15C	世阿弥能本	1													
	応永二十七年本論語抄	6	2	1			1								
	史記桃源抄	8													2
16C	中華若木詩抄	6				2	1	1							
	天草版平家物語	23	1		1		2								
	エソボのハプラス	8				1		1							
	ばうちずもの授けやう	6													
	ぎやどべかどる	54	3		1										
	どちりなきりしたん	11	1												
おらしよの鱧訳	1														
17C	室町物語	23			1		1								1
	舞の本	31					3								5
	醒睡笑	3				1									
	虎明本狂言	11					1	2							
	狂言六義	11							1	1	1				
	捷解新語・原刊本	3													
	雑兵物語							1							
	好色伝授												1		
	西鶴	2			1		1			2				1	2
18C	捷解新語・改修本	3						1							
	近松世話物	10			4			7	9	1		2		1	1
	雨月物語	3													
	東海道中膝栗毛	1						2	2			1	1		
	浮世風呂	1			1			1	1	1					

表2 後期の「たとひ」の使用状況

前期は漢文訓読調の資料に用例が多かったが、後期になると、口語資料として扱われているキリシタン資料（エソポのハブラス・天草版平家物語）や狂言資料（虎明本・狂言六義）にも用例があるという点で、使用範囲が拡大している。次の例は、女が鬼に向かって話す箇所用にいられた虎明本狂言の例である。

20 「たとひわれらは食はるとも、この子を食はせまらする事はえいたすまい」（虎明本狂言「鬼のまま子」）

このように、「たとひ」を用いる人物の偏りもなくなっており、漢文を訓読した語という意識も薄れ、一般の語となっているものと思われる。

五・二 照応する形式について

前期に引き続き、「とも」と照応した例が中心となることは変わらない。

その他の形式を見ると、前期には用いられていない形式が多く現れている。用例21は「命令形」、22は「活用語＋も」「ても」、23は「体言＋も」、24は「でも」、25は「已然形＋ばとて」、26は「うと」、27は「うが」、28は「とて」、29は「てから」と照応した例である。

21 信俊涙をおさへ申けるは「……。縦、此身はいかなる目にもあひ候へ、とうとう御文給はッて参り候はん」とぞ申ける。（寛一
本平家物語、巻二、大納言死去）

22 「白頭縦タトヒナルモ作（一）花園ノ主ト酔折テハ花枝ヲ是レ別人」……白頭ニナリテハ、タトヒ吾家ニ園花ヲ持テモ、万事面白モナケレバ、
行テ見ルコトモナイゾ。（中華若木詩抄、上49ウ）

23 常に虚言を言ふ者は、たとひ真を言ふ時も、人が信ぜぬものぢや。（エソポのハブラス、四九〇・2）

24 たとい、よその者でも、人の物を取らうと云は、盗人でいたづら者よ。（狂言六義「瘦松」）

- 25 (師)「たとい、さうあればとて、師匠に對して、そのやうな慮外をぬかす物か」(狂言六義「忠喜」)
- 26 たとい、梟であらうとままと云て、又祈る。(狂言六義「梟」)
- 27 たとへ平様が盗人で有ふが、強盜で有ふが、いとしようていとしようて、命をやつた此さがじや。(近松・生玉心中、五八七頁)
- 28 たとい是でしぬるとて、そなたにあいをたのもうか。(好色伝授、36ウ3)
- 29 京大坂にては、相場ちがひのものは、たとへ祝儀のものにしてから、中々調ふべき人心にはあらず。(西鶴・世間胸算用、三〇八頁)

このうち用例22の「も」と照応した例は、漢詩を訓読した箇所に見えている。「も」と照応した例は前期の日本語文には見えないが、訓点資料には見られる例であり(大坪併治「一九五一・三一六」)、新しい形式ではない。名詞に接続した例のみを挙げる。

- 30 仮使ひ山林野人の輩も、亦常に〔於〕天女を供養す。(西大寺本金光明最勝王經古点、卷七・一二紙)

その他の形式は、いずれも逆接仮定の意に関わる形式で、「たとひ」を伴わずに単独で逆接仮定を表した例がある。以下、順に見ていくことにする。⁴⁾

まず、「命令形」は、命令用法だけではなく、放任用法も使われていた。次の例の「返したてまつれ」は祈願を表す命令用法であるが、「まれ」は「もあれ」が縮約した放任用法である。

- 31 「あが君を取りたてまつりたらむ(モノハ)、人にまれ、鬼にまれ、返したてまつれ。(源氏物語・蜻蛉、一九三四頁)

放任用法は、主節の事態がどのような場合でも成り立つことを示すために、ある事態を想定して挙げる点で逆接仮定に通じる。その

ため、「たとひ」と照応して用いるようになったのだろう。⁽⁵⁾

その他の形式は、中世後期から近世にかけて現れた逆接仮定を表す形式である。虎明本狂言の逆接仮定の形式に、「ても」「でも」「已然形+ばとて」「うと」が見られることを小林賢次「一九九六・二二八」が指摘している。虎明本狂言から例を挙げる。

32 (舅) 此上は娘が合点いたすとも、身共が聞きまらせぬ。(聾) おごうが合点いたしても聞くまいとは、そなたが女房に持たうと云ふ事か。(乞聲)

33 路次でお茶なりと申さう物を、雑談に申しいつて、お茶でも申さいで、お残り多い。(餅酒)

34 女どもが寄せて来たればとて、ふかしい事があらうか。(鬚槽)

35 (鬼) そなたは此家に、一人おじやるか。(女) 一人ぬようと、二人ぬようと、かまふてのようは。(節分)

用例32は「とも」と同じ文脈で「ても」を用いている。用例34は「でも」の例、用例35は「已然形+ばとて」で「だからといって」という仮定の意を表した例、用例36は「うと」の例である。このように、それぞれ単独で逆接仮定の意を表すことができる形式であり、「たとひ」を用いた場合にも現れたということが確認できる。

ところで、用例33には、「お茶なりと」のように「と」で逆接仮定を表した例もある。表2で「その他」とした中にある舞の本の5例はすべて「たとひ」が「と」と照応した例である。

36 たとひ討たれ給はずと、土佐をば終に討たるべし。(舞の本「堀河夜討」)

用例27の「うが」は、虎明本狂言には見られないが、虎寛本狂言や近松世話浄瑠璃に見られることを小林賢次「一九九六・二四〇」が指摘している。やや遅れて、逆接仮定に関わる形式となったようである。また、用例28「とて」とある例も、虎明本狂言にはなく虎

寛本狂言にあることを指摘しているが、近世の表現と考えるとよいと思われる。用例29の「てから」は、近世に見られるようになった形式である（湯澤幸吉郎「一九三六」）。

37 この風俗で小女郎にあひたいといふたりとも聞き入れじ。聞き入れてから小女郎が恥。（近松・博多小女郎波枕）

最後に、表2で「その他」としたもので、これまで触れていないものを挙げる。「こそべけれ」1例（室町物語）、「を以ても」1例（ぎやどべかどる）、「次第」1例（西鶴）、「までも」1例（西鶴）、「にも」1例（近松）である。『史記桃源抄』の2例は訓読部分に現れた「ましかば」「て」の例なので、日本語文での例ではない。

このうち、「こそべけれ」は前期に見られた「こそめ」の後世的な表現であると思われる。「までも」についてはこれといった指摘が見当たらないが、慶長古活字版『源平盛衰記』にも「たとひ」と照応した例がある。これも新しい形式だろう。

38 武士は綺羅を本としてつとむる身なれば、たとへ無僕のさぶらひまでも、風義常にしておもはしからず。（西鶴・日本永代蔵、四七頁）

39 縦無間ノ底マデモ、身二代又人也。（源平盛衰記、卷一八、三・二〇六頁）

以上のように、後期の「たとひ」の構文は、新たに逆接仮定に関わるようになった形式と照応する例が現れるという点で形式レベルの変化が見られた。

五・三 衰退した形式について

一方、表2を見ると、前期に使われていた「ども」「む+助詞」は後期一五・一六世紀頃には衰退している。

「ども」が衰退するのは、中世後期に「ども」が一般条件を表さなくなっていくことに伴う衰退である。四・二で「たとひ―ども」の例が、一般条件を表したものであることを見た。「ども」は虎明本狂言の時代でも、逆接確定条件を表す中心的な形式であるが、一般条件を表す用法は「ても」が担うようになっていく（小林賢次「一九九六・二四二」、吉田永弘「二〇一五」）。

40 わごりよは律儀な人じや。皆人は悪うできても、よいと云ひて売るに、奇特な事をいふ人じや。（虎明本狂言「河原太郎」）

用例40は「酒が悪くできても良いと言って売る」という一般論を「ても」によって表している。一般条件を表す形式が「ども」から「ても」へ交替したことによって、「たとひ」が「ども」と照応する例が用いられなくなっていくのである。

「む＋助詞」は、準体法の「む」に係助詞・副助詞・格助詞がついて、逆接仮定節相当の意味を表した。それが衰退するのは、中世後期に「む」が準体法で用いられなくなっていく変化に伴う衰退である。新たに現れた「うと」「うが」は、「む＋助詞」の後継の形式のように見えるが、「うと」「うが」の「う」は、接続助詞の「と」「が」を後接し、準体句ではなく用言句を構成しているので、「む＋助詞」とは異なる形式である。「む」を用いない助詞の複合形である「とても」のほうが、「む＋助詞」の領域を担いうる形式と言っ
よいかもしれない。

このように、条件表現形式や「む」の用法の変化に伴って、形式そのものが使われなくなり、「たとひ」とも照応しなくなった形式もある。

五・四 本節のまとめ

後期の「たとひ」は、文体的な偏りがなくなっていく、一般的な語として用いられるようになっていく。「たとひ―逆接仮定」という意味レベルの構文に変化はないが、形式レベルでは、「とも」と照応するのが典型という点では変わらないが、逆接仮定の意に関わる諸形式には消長が見られた。

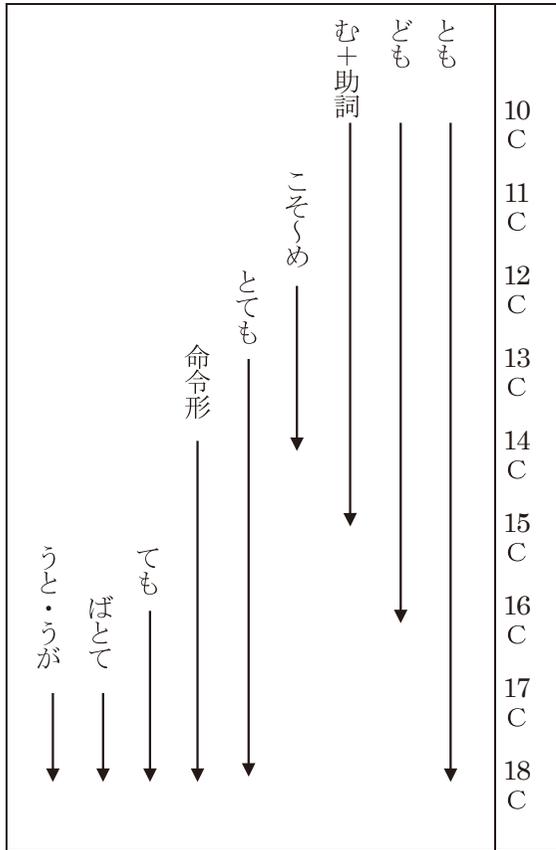


図1 逆接仮定に関わる形式の消長

三節で前期、四節で後期の「たとひ」構文の使用状況を見てきたが、本節では「たとひ」構文の史的展開について見ていく。日本語文においては、「たとひ―逆接仮定」という意味レベルの構文は、一貫して変わっていないと考えられる。一方、形式レベルの構文は、逆接仮定の意を表すさまざまな形式が用いられ、時代によって使われる形式は異なった。「たとひ」の構文の史的展開を見ることで、逆接仮定に関わる形式の消長を見ることができるのである。その主な形式の消長をまとめると次の図1のようになる。

六 「たとひ」構文

このうち、逆接仮定を専用に表す形式である「とも」は前後期を通して一貫して用いられ、「たとひ」と照応する典型的な形式である。その点で、一見変化がないように見えるが、前期と後期では意味合いが異なっていると考えられる。

すなわち、前期は逆接仮定の専用形式としては「とも」しかなかった。「たとひ」が「とも」と照応するのは当然の結果だったのである。

ところが、後期一六世紀頃に「ても」と照応した例が現れる。「ても」は、先に述べた逆接の一般条件を表すとともに、逆接仮定条件を表す専用形式となつて、「とも」と交替していく形式である(吉田永弘「二〇一五」)。湯澤幸吉郎「一九二九」をはじめとして、狂言資料(小林賢次「一九九六・三二七」)、朝鮮資料(浜田敦「一九七〇・三〇一」)、抄物資料(高見三郎「一九九六」)で明らかにされているように、「とも」から「ても」への交替は、室町時代から江戸時代にかけて起きたと考えられている。「ても」が現れた段階で、逆接仮定を表す専用形式に新旧の二形式があることになる。当時の「とも」と「ても」に着目して見ていくことにする。

表3は、室町時代から江戸時代にかけて成立した資料の「とも」と「ても」の用例数である。「とも」は動詞、形容詞、助動詞に後接した例を分けた(「るる・らるる」に後接した例は動詞の例に含めた)。

表3 「とも」と「ても」

	エソポのハプラス (一五九三刊)	醒睡笑 (一六二八識)	虎明本狂言 (一六四二写)	狂言六義 (一七世紀中頃成)
動詞+とも	15	14	75	39
形容詞+とも	2	7	8	12
助動詞+とも	4	16	273	190
ても	9	30	180	101

総用例数としては「とも」のほうが多いが、「ても」が後接しない「なりとも」「たりとも」「ずとも」「うとも」などの助動詞に後接

した例を除き、動詞と形容詞に後接した例と比較すると、一七世紀の前期から中期にかけて「とも」から「ても」へと勢力が逆転していることが明らかである。⁷⁾

このように、「ても」の使用数が増加していることがわかるが、その割には、「たとひ」と照応する例が少ない。虎明本狂言では、「とも」の11例に対して、「ても」は2例の照応例しかない。「とも」の11例のうち3例が助動詞に後接した例であることを差し引き、動詞・形容詞に後接した例について見ると、「とも」が70例中8例であるのに対し、「ても」は160例中2例の照応であるから、「たとひ」を用いた場合には、「とも」で照応するという規範意識があったものと思われる。「たとひ」が「とも」を拘束する力は強くないが、決して弱くはない。

一七世紀初頭に「とも」と照応するのが典型だと認識されていたらしいことは、キリシタン宣教師のロドリゲスによって書かれた文法書の『日本大文典』(二六〇四・八)の記述からもうかがわれる。

41 しばしば許容法に用ゐるが、それに続く動詞の終にはTomo (とも) を置いてそれを承ける。即ち、その支配関係は、常に句の前に置きその後Tomō (とも)、又は、toyūto (とよふとも) を置くことになつてゐる。(「TATTOI」項、土井忠生訳、四九五頁)

一方の「ても」については、許容法・讓歩法の未来に「Narōtariomo (習うたりとも)」とともに「Narōtemo (習うても)」(土井忠生訳、一四八頁)の例を挙げているものの、「も」の項に、「Te (て) を語尾とする分詞の後に置かれたものは反戻の助辞となる」(土井忠生訳、四八六頁)として複合助辞として逆接の意を認めているだけである。『日葡辞書』でも「とも」は立項しているが「ても」は立項していないので、一語として扱っていない。

この記述は日本人の規範意識とそう変わらないものと思われる。それでは、「たとひ―とも」を典型と捉える段階から「たとひ―ても」を典型と捉える段階へいつ変わったのだろうか。残念ながら、表2からは読み取ることができない。今後、江戸時代後期以降の「たと

ひ」の使用状況を詳しく検討する必要があるが、今試みに「太陽コーパス」で近代の状況を観察する。次の表4は、平仮名書きの「たとへ」を検索して、「とも」「ても」と照応した用例数をまとめたものである（「とも」は前接する品詞の内訳を示した。なお、「仮令」「縦令」「たとひ」などの例を含めず、平仮名書きの「たとへ」に限ったのは、より口語的な表現での状況を把握するためである）。

表4 太陽コーパスの「たとへーとも」「たとへーても」

刊行年	1895	1901	1909	1917	1925
とも	14 (動11、形1、助動2)	14 (動9、助動5)	7 (形2、助動5)	0	7 (動1、形1、助動5)
ても	0	2	3	2	17

これによると、一九〇一年までは「とも」と照応する例が多いが、一九〇九年では動詞に承接する場合は「ても」と照応しているの
で、この頃から「ても」と照応することが典型となったことが推測される。不十分な調査ではあるが、接続助詞の「とも」から「ても」への交替に比べ、「たとひ」と照応する場合の変化は遅れるようである。

最後に、現代語の「たとひ」について簡単に触れる。現代の国語辞典の「たとえ」の項の用例（作例）を見ると、その規範意識を垣間見ることができると思われる。『新明解国語辞典第七版』（三省堂、二〇一〇）では「ても」と「うが」の例を載せ、『旺文社国語辞典第十一版』（二〇一三）では「あとに」「でも」「とも」などを伴う」とあり、『明鏡国語辞典第二版』（大修館、二〇一〇）では、「ても」と「命令形」の例を載せる。すべてに載る「ても」が典型的な形式と考えられる。

現代語の実態を探る一つの例として、『CD-ROM版新潮文庫の100冊』で「たとえ」（歴史的仮名遣いの例を除く）を検索してみると、752例の使用例があった。照応する形式は、「ても」376例、「でも」117例、「命令形」75例、「うとも」43例、「うと」42例、「たところ」32例、「って」30例、「形容詞+とも」12例というように続く。「とも」は「うとも」「形容詞+とも」の形で使われ続けているが、動詞

に後接した例は歴史小説に1例あるだけなので減びたと見てもよいだろう。⁽⁸⁾

七 おわりに

本稿では日本語文で用いられた副詞「たとひ」について、前期（一四世紀前半まで）と後期（一四世紀後半以降）とに分けて見てきた。簡単にまとめて結びとしたい。

- 1 前期には漢文訓読を意識した箇所で見られるという位相の偏りがあるが、後期にはない。
- 2 本来の日本語に副詞としてあったのではなく、漢語の「仮令」「縦」などを訓読する際に当てた訳語を日本語文に取り入れたものと考えられる。
- 3 「たとひ」構文を意味レベルと形式レベルに分けると、意味レベルでは、「たとひ」逆接仮定」の構文として前後期を通して変わらないが、形式レベルでは「たとひ」とも」を典型として、逆接仮定の意に関わる諸形式と照応する。
- 4 逆接仮定の意に関わる形式には、前後期を通して用いられる「とも」の他、前期には「ども」「む＋助詞」「こそめ」、後期には「とても」「命令形」「ても」「ばとて」「うと・うが」などの形式が見られる。
- 5 逆接仮定を表す接続助詞が「とも」から「ても」へと交替しても、「たとひ」と照応する場合には「とも」が使われやすく、「たとひ」とも」という規範意識は近代まで続いたと考えられる。

注

- (1) 大坪併治「一九八一・三三三」は『源氏物語』の4例について、「三例は、僧侶とか田舎受領とかいった、古風で固苦しい男性の詞に用ゐられてをり、一例は、天子が古書に前例を求める、極めて厳肅で緊張した場面であつて、作者は、タトヒを、特殊な表現効果を狙つて、意図的に用ゐたものと考えへ

られる」と述べている。

- (2) 土左日記、竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、落窪物語、篁物語、多武峯少将物語、かげろふ日記、枕草子、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、四条宮下野集、大鏡、讃岐典侍日記、古本説話集、宇治拾遺物語、梁塵秘抄、新古今和歌集には用例がなかった。
- (3) 田島毓堂「一九七七・八四八」は、『正法眼蔵』（二三世紀成、一五世紀写の「乾坤院本」の「たとひ」329例のうち「未然形+ば」が2例あることを指摘している。この資料は漢文訓読調の度合いが強い資料である。
- (4) 山口堯二「一九九六・一五七―一七四」では、鎌倉・室町時代以降の逆接仮定の意に関わる諸形式が扱われ、「たとひ」と照応した多くの例が挙げられている。
- (5) 原栄一「一九七四」は「命令形」と照応する例が『今昔物語集』になく、『覚一本平家物語』で見られるようになったことを指摘している。また、田島毓堂「一九七七・八四八」は『正法眼蔵』に「命令形」と照応した例があることを指摘している。
- (6) 高見三郎「一九九六」は「ても」と照応した例が『杜詩統翠抄』に見られることを指摘している。
- (7) 小林賢次「一九九六・二三五」は、虎明本狂言の頃に「すでに」「動詞終止形+トモ」から「動詞連用形+テモ」に移行していると言っており「よ」と指摘している。
- (8) 前田直子「二〇一四」では、現代語の「とも」の使用状況が示されている。

使用テキスト

古今和歌集・覚一本平家物語・室町物語集……新日本古典文学大系（岩波書店）、枕草子・うつほ物語……新編日本古典文学全集（小学館）、今昔物語集・夜の寝覚・古今著聞集・西鶴（日本永代蔵・好色一代女・世間胸算用の3作品）……日本古典文学大系（岩波書店）、西大寺本金光明最勝王経古点……春日政治（一九四二）、法華経玄賛卷第三……『石山寺資料叢書聖教篇第一』（法蔵館）、近松世話浄瑠璃……『近松全集』（岩波書店）、『源氏物語大成校異篇』（中央公論社）、『三宝絵詞自立語索引』『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵』（以上、笠間書院）、『発心集 本文・自立語索引』『エソポのハブラス 本文と総索引』『キリシタン

版ぎやどべかどる 本文・索引』『大藏虎明能狂言集 翻刻 注解』(以上、清文堂出版)、『足利本仮名書き法華経』『延慶本平家物語』『狂言六義全注』(以上、勉誠出版)、『中華若木詩抄』(勉誠社文庫)、『世阿弥自筆能本集』(岩波書店)、『史記桃源抄の研究』(日本学術振興会)、『ロドリゲス 日本大文典』(三省堂)、『源平盛衰記(一〜六)』(三弥井書店) [CD-ROM版 新潮文庫の100冊] (新潮社)、『太陽コーパス』(博文館新社)、『人間失格・グッド・バイ』(岩波文庫)

参考文献

- 大坪併治「一九八二」『平安時代における訓点語の文法』風間書房
- 春日政治「一九四二」『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』一九六九、勉誠社刊による。
- 小林賢次「一九九六」『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 高見三郎「一九九六」『抄物の逆接「テモ」』『国語国文』65巻5号、559-571頁
- 田島毓堂「一九七七」『正法眼蔵の国語学的研究』笠間書院
- 築島裕「一九六三」『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 浜田敦「一九七〇」『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 原栄一「一九六九」『今昔物語集における副詞の呼応』『金沢大学教養部論集』6、45-70頁
- 原栄一「一九七四」『平家物語副詞覚書(その一)——今昔物語集との比較から——』『金沢大学教養部論集』11、37-52頁
- 久山善正「一九五九」『タトヒ』(仮使・仮令)についての一考察』『訓点語と訓点資料』11、41-58頁
- 前田直子「二〇一四」『現代日本語における「〜とも」の意味・用法「〜ても」と比較して』『日本語複文構文の研究』129-142頁、ひつじ書房
- 山口堯二「一九九六」『日本語接続法史論』和泉書院
- 湯澤幸吉郎「一九二九」『室町時代言語の研究』一九七〇、風間書房刊による。
- 湯澤幸吉郎「一九三六」『徳川時代言語の研究』一九七〇、風間書房刊による。

- 吉田永弘「二〇一二」『平家物語と日本語史』『説林』60、53―68頁
- 吉田永弘「二〇一四」『古代語と現代語のあいだ―転換期中世語文法―』『日本語学』33巻1号、72―84頁、明治書院
- 吉田永弘「二〇一五」『とも』から『ても』へ』『日英語の文法化と構文化』299―320頁、ひつじ書房